

# 海に生かされる人々

## 伝承や 民間信仰に見る、 日本人の 海へのまなざし

文 古家信平

### 海女に見る 海の世界—— 竜宮の使いとしての鮫

日本人の心の底には、海に対する畏敬の念や感謝の気持ちが流れているのではないだろうか。各地に残る伝承や民間儀礼から、海からもたらされる恵みに、私たちがいかに感謝し、信仰心を寄せていたのかを探る。

三重県の鳥羽、志摩には現在1000人ほどの海女が活躍し、素潜りでサザエやアワビを採集して生業としている。ここ20年でその数は半減したといわれているが、それでも日本各地に見られる海女の総数の半分がこの地域に展開している。私は昨年、70人ほどの海女がいる志摩市志摩町和具で早朝から船に乗り、漁をする様子を間近に見る機会があった。1隻の船に船頭が1人と12人の海女が相乗りして沖に向かうことになった。

ほとんどが60歳前後かそれ以上の女性であったが、若いころから潜っていたとしても一人前になるにはかなりの経験が必要である。毎年の出漁シーズンが終わるころに貯金通帳を眺めるのが楽しみというほどになるまでには、10年くらいは必要らしいので、同乗した彼女らはベテランぞろいということになる。

海女が持つ手ぬぐいには、ひと筆書

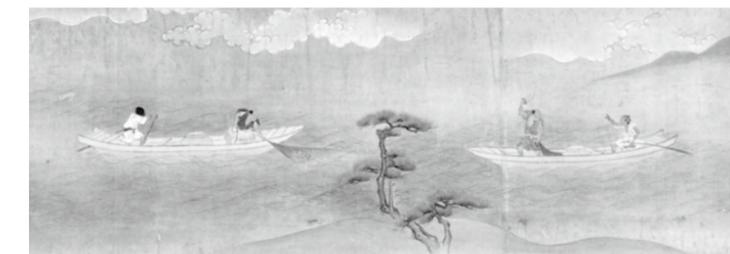
いうところから浅草寺の山号になっている。その像は小さな黄金像であるが、大化年間に勝海上人が本堂再建の際に、これを秘仏として厨子の中に安置することになり、以来その姿が見られることはない。

〔台東区史〕(上)他より

もうひとつ、横浜市神奈川区能満寺の本尊についての言い伝えを紹介しよう。

寺の本尊観音が海からすくいあげられたものという言い伝えは、人々が、聖なる信仰の対象をも、海からもたらされる恵みの中に入れて考えていたことを示唆する。

(浅草寺藏「浅草寺寛文縁起絵巻」より)



「本尊感得の図」

に持ち帰った。すると、その娘がにわか狂いだして飛び回り、あれよあれよと海上を走るがごとくはるか沖合に出て行って姿を消してしまっただ。せめて娘の遺骸だけでも探そうと小舟の用意をしていると、娘が鉄砲玉のように飛びかえり血走する目をして、「汝が網にかかった朽木こそ、

きで書いた星の形が黒糸で縫い付けてある。これは「セーマン」といって、陰陽師・安倍晴明に由来するともいわれ、ひと筆で書くのははじめも終わりもないため魔物が入ってこられないという安全祈願のまじないである。船が突堤を出て間もなく、彼女たちは沖合にある大島に向かい進む。ここには年に一度海女が当日の朝とれたアワビやサザエを供え、市杵島姫命を迎えて祭り、豊漁と安全を祈っている。

この地域の海女は夏の土用のころ漁を休んで、伊勢神宮の別宮の伊雑宮や鳥羽市の青峰山正福寺を参拝する。伊雑宮には毎年旧暦6月24日に7匹の鮫がお参りに来ていたけれど、そのうちの1匹を漁師が殺してしまい、怒った鮫がこの漁師をかみ殺してしまっただ。その後は残った6匹の鮫がお参りに来るので、この日に海女は漁を休み伊雑宮にお参りをするという。鮫は竜宮の使いとも言われている。

青峰山は海の方から見るとよく目立ち航路の目印ともなっていて、海女は漁期の始まりと終わりに参拝したり、お守りを首にかけてたりする。本尊の一面観音はクジラの背中に乗って現わ

房州清澄の關伽井に700年を経た霊木である。早々に寺を建てて供養せよ。無辺の利益を授くべし。」と言い、たちまち正気に戻った。村人が堂宇を建立したところ、紫雲がその堂を覆い、一陣の風が吹いて紫雲を払うと、朽木は三寸九分の虚空蔵菩薩に変じていた。

〔日本伝説大系〕第5巻より

このように、例をあげればきりがなほほどである。光り輝く玉、神像、仏像が海から流れてきて拾い上げられたという伝説には、その根底に、「海はよきにつけあしきにつけ、さまざまなものを送り届けてくれる」という発想が認められる。実際に私たちが砂浜の海岸を歩いていると、いろいろなものが打ち上げられているのを目にする。流木、木の実、魚、サンゴ、貝などのほか、ペットボトル、ビン、発泡スチロールなどの人工物も混ざっている。木の実で思い浮かぶのは、島崎藤村の「椰子の実」の詩であろう。

名も知らぬ遠き島より  
流れ寄る椰子の実一つ  
故郷の岸を離れて  
汝はそも波に幾月……  
思いやる八重の汐々  
いずれの日にか故国に帰らん

1901年に刊行の詩集に載せられているが、その3年前に伊良湖岬に遊んだ民俗学者柳田國男が、浜に流れる

れ、この寺に祭られたという伝説がある。海で生計を立てる海女の信仰の中に、竜宮の使いとか本尊が海からもたらされたという海とのつながりが含まれているが、これは何も海女の人たちの間にだけ見られる特殊なものではない。

### 海から与えられるもの

海から神霊がもたらされるという伝説は、海に面した各地にみられる。

東京都台東区浅草寺の創建についての言い伝えによると、日本の仏教伝来の時期にほど近い推古朝36(628)年までさかのぼることができると。晴天に恵まれた穏やかな日に二人の漁師が漁に出てみると、隅田の海浜で水中からはからずも黄金の聖観音像を網ですくいあげた。これは徳なることだと草ぶきの飯屋を作り祭ることにした。網ですくいあげられる前触れとして、隅田川畔に忽然と丘陵が隆起し、地面が大いに揺れ動き、雲煙が逆巻くと金の竜が天から降りてきて、地表の変動を守護したといわれる。その丘陵を金龍山と

いた椰子の実の話を藤村に語ったことが創作の源になっている。柳田は「南島」に対する思い入れが強く、近世までの人にとつての「西方浄土」や「蓬莱山」といった異界に似た、特別な感情を持っていたようである。それらは海のかなたにあるロマンチックなユートピアのイメージを背景としている。

### 与え、 奪うものとしての 海の両義性

海岸に打ち寄せられるものは「寄りもの」と言われる。このうち、流木は昔話でもよく登場している。沖縄県国頭郡本部町に伝えられる昔話を紹介しよう。

昔、あるところに2人の親しい友達がいる、ある晩、海に出かけて行ったが、潮がまだ引いていなかった。「潮が引くまでの間、あの寄木のところに行って寝ていようではないか。」「それではこの寄木に俺が寝るから、あつちにある寄木にあんたが寝なさい。」2人とも寝込んでみると、一人の男に木の精が「男の子は箕を作って生計を立てる。女の子は歳の主になる。」というのが聞こえる。変な話を聞いたものだと起き上がってみると、潮は十分に満ちてもう海には出られなくなっていた。そこで、家に帰ってみると男の子が生まれていた。もう一人の友達



新潟県山北町(現村上市)

当地では、子供が生まれると  
その子の胎盤を藁苞に入れて、  
近くの海岸線から引き潮の時に海に流す  
という風習があった。  
海から命がもたらされると、  
人が考えていたことを象徴する行いである。  
写真の漁民は、寒さ除けのフシという  
被り物をして、網を繕っている。

1979年 著者撮影

家には女の子が生まれていた。男は木の精の語ったことが、ずっと忘れられずに過ごしていた。やがて年頃になった2人を夫婦にしたそうだが、そうするとその家はどんどん栄えていって、蔵の主になったそう。召使いや下男下女をたくさん使ったようになり、妻は彼らにたくさんおいしいものを食べさせ、彼らは一生懸命に働いて、富はいよいよ増えて蔵が2つになり、さらに建て増しするほどであった。ところが夫は「お前のようなやり方では、家計がもたない。後に財産をなくしてしまおう。」と言って、妻を追い出してしまふ。

その時、妊娠していた妻は山奥に入って行き、貧しい炭焼きのもとに身を寄せる。不思議なことに炭焼き窯を掘った時の石が、すべて小判になり、やがて近くの村の家々を買い取って大きな店で商売をするようになった。妻が生んだ子供が4、5歳になったころ、箕を売りに来た元の夫は、それが自分の子であることを知り、舌を噛み切って死んでしまった。〔日本昔話通観〕第26巻より

浜に流れ着いた流木を「奇木」といい、人がそれを枕に寝ていると神の間答が聞こえてくるという、昔話の中の「産神問答」に相当する例である。この本部町の話では、問答する産神は奇木の精だが、これを竜宮の神とする昔話もある。八重山では、ニールン神が運を授け

ひ一緒に来てくれ。」とためらう男を無理に乗せて竜宮世界へ行く。竜宮神は若木のお札に御馳走し、ヤナジという犬をくれて、「この犬は1升の飯を食わせると1升の銭をひる。大事にせよ。」と言いつく。男は帰って言われるようにし、金持ちになる。

次は、鹿児島県大島郡龍郷町の昔話である。



沖縄県・辺野古の隣にある久志集落にて。  
右/龍宮の碑の前で海に向かって拝むノロ。  
左/この後に行われた船漕ぎ競争の様。1975年の貴重な記録である。  
(著者撮影)

### 久志集落におけるアブシバレーの儀礼

ある男が田を作ろうとするが、大雨で畦が流されて田にならない。がっかりして天を眺めていると、福神が降りてきて話を聞き、「田の畦を立てるグユの種をやる」と草の種をくれる。畦にその種をまくと立派な畦ができたが、コメの種がなくて困っている。また、福神が来て、ネリヤから荒神様が盗んできた米を持ってきてくれる。そして、無事に米ができて喜んでみると、ネリヤからネズミが来て食べてしまう。〔日本昔話通観〕第25巻

にやってくる。「ニールン」は海のかたの常世の国を暗示しており、竜宮との共通性が窺える。よい運を授ける一方で、悪い運を授けるのも海からやってくる神なのである。

運ばかりでなく、海の神は人の寿命にかかわるといふ語りも聞かれる。東京都八丈島では、次のように伝えられている。

昔、海の中から海の神様がこの島の港にやってきて、どういうわけか一人の子供が7つの時に、その子の命を取りに来る、という話があった。それを聞いた人が、その子の親に話したものがどうか迷ったけど、話したって、それから親はその子をいとしく思って、フキの葉とヨモギの葉をくるんで、マクサでしばって、そんなのをたくさん作ったそう。今日が子供の死ぬ日だ、という時に、海の神様はマクサをほどいては落とすし、ほどいては落としていっているうちに、時間がたつてしまふ、「ここには一生来るなよ。」と言いつく残して海に帰って行った。そんなことがあつて、マクサとヨモギを一緒にして軒端にさすようになった。昔は魔除けだと言つて、5月5日にはみんな挿していた。〔文化財の保護〕第6号より

30年ほど前に新潟県山北町(現・村上市)の海辺の集落で、子供が生まれると、その子の胎盤を藁苞に入れて引

この二つの昔話には竜宮世界と「ネリヤ」が登場する。ネリヤは八重山でニールンといい、沖縄本島で「ニライ・カナイ」という、海のかなたにある常世の国であり、銭を排出する犬とか穀物の種など人に富をもたらすものと一緒に、ネズミのような害をもたらすものも送ってくる。

### 伝承と民俗を伝える場としての海

私は1973年から、沖縄本島の北部東海岸にある辺野古で祭り行事を調べている。先に産神問答の昔話を紹介した本部町より東にある小さな集落である。ここではニライ・カナイに相当するのは「ウフアガリジマ」と言われる。「アブシバレー」という、田に害虫が発生するところに行われる行事では、女性神役たちがバナナの葉で作った船に田の害虫を乗せて、海岸から東方海上のかなたにあるウフアガリジマに流していた。ウフアガリジマにはこの世の悪いものを浄化する作用もあるらしいのである。隣の久志ではノロ(琉球王国時代には首里の王府から任命された公的司祭)が龍宮の碑の前から拝み、その後で船漕ぎ競争をしていた。

辺野古では戦後、農耕地や山林は米軍の演習場に接収されて、コメはもうずいぶん長い間作られていない。実生活では害虫など発生しないのだが、それでも女性神役たちを中心として儀礼は続けられ、バナナの葉はなくとも神

き潮の時に海に流す、という話を聞いたことがある。胎盤はその子供の将来を左右すると考えられ、土地によって決まった処理法が伝えられているのが普通である。例えば、ナンテンの木の下に埋めるといふ例は、ナンテンの「難を転じる」という語呂合わせで子供の健やかな成長を祈るといふ具合である。海に戻すのは、海からもたらされた命であるから、胎盤を海に返し次の子供の出生を祈るといふことであつた。

海は生命を与えるところでもあり、それを奪うところでもあるという両義的な存在として考えられていることが、こうした昔話や民俗事例から窺える。

### 海と「常世の国」をめぐる

これまで紹介した伝承・昔話を見ると、伊勢神宮別宮の伊雑宮では鮫が竜宮の使いとされ、またほかの話では奇木の精、竜宮の神、海の神、ニールン神なども使いとされている。竜宮と人との間では、どのようなやり取りがなされているのだろうか。「竜宮のみやげ」という昔話の中にいくつか描かれているので、紹介してみよう。鹿児島県熊毛郡中種子町の昔話である。

ある人が若木を売って正月物を買おうと、歳の晩の29日に3束担いで出るが売れないので、「竜宮神にあげよう」と海へ投げ込んで帰る。亀が来て「竜宮神の使いで来た。ぜ

酒などの供物は集落の予算から支出される。これらは鳥羽・志摩の海女の信仰が、実生活を反映しているのとは違っている。しかし、日本各地に伝えられる伝説や昔話の中には、単に神霊の由来を説くものから、生命を与え、豊穡をもたらす、あるいはそれらを奪うという、海の根源的なイメージにいたる広がりがある。そうであるがゆえに、私たちの実生活が伝説や昔話に描かれた農耕・漁労生活から離れても、心情として理解できるのである。辺野古でアブシバレーの儀礼を行うのは、農耕を離れても海の浄化作用に期待する意思がそこにあるからである。

では、こうした海に対するイメージは、海に漕ぎ出して魚を追い、あるいは物資を積んで海を縦横に往来した海洋民族のものであろうか。おそらく、海に面した集落で農業を営む人々が、眼前に広がる海を眺め、漂流物を手にし、想像を広げた成果であろう。未知の世界に対する恐れと憧れが、伝説、昔話、儀礼に両義的性格を与えたのである。現在の私たちも海からの富に感謝するだけでなく、破壊的な力への畏怖の念を抱いており、ここに述べてきた民俗の世界に同調できるのである。

Furue Shimpel

ふらいえしんぺい/筑波大学大学院人文社会科学部 研究科教授。1952年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退。民俗宗教を中心に、人々の暮らしに根づく祭りや儀礼の意味等を研究している。著書に「火と水の民俗文化誌」「日本の民俗(12)南島の暮らし」ほか。